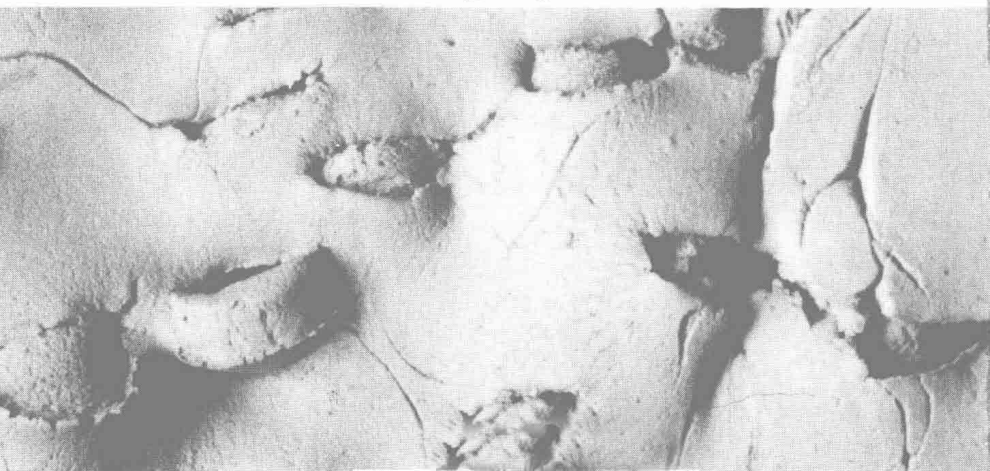




古庭栄司 神の鎖

神の鎖



古庭栄司

神の鎖

第1刷発行 昭和51年7月8日

著 者 古庭栄司

発行者 野間省一



発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二

〒一一二 振替 東京 八一三九三〇

電話 東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

©古庭栄司 昭和51年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。(文二)

古庭栄司 (こばえいじ)

本名、黒羽栄司。一九二八年生まれ。秋田市出身。旧満州国の奉天一中卒業後、ハルビン学院に在学し、終戦を迎えた。一九五三年に帰国、愛知大学文学部を卒業。現在は名古屋で市立中学校の教諭。

第一章	誘	目次
第二章	喪	
第三章	転	
第四章	疑	
第五章	瀆	

拐 失 生 惑 神

装帧
木戸純治

第一章 誘拐

1

美沙子が姿を消したのは、暮れもおしつまったクリスマスイブの夜ふけ、星もまたたくのを忘れて凍てついたかと思われるような寒い日だった。

電車を降りたとき彼女のてのひらには、新宿のホームで別れた吉浦の手のぬくみがまだ握りしめられていた。彼女はそれをだいじそうにコートのポケットに入れて歩いた。吉浦は手を握りあうよりはきつと、キスがしたかったのにちがいない。それをさまたげたのはホームの雑踏ではなくて、彼自身のためらいだった。初めてのキスにはためらいがともなうものだ。彼は劇団のコンパのあと街にさまよいでて何とか仲間をまき、二人だけになってスタンドバーや喫茶店をわたり歩きながらその機会をうかがっていた。その気配は彼女にもわかったし、できればそうしてほしいという期待もあったのだが、吉浦が自分の気おくれを払いのけるのにはアルコールが足りなかったのかも知れない。しかしそれを意識すると、いくら飲んでもかえって気持がさめてしまったのだ。それに美沙子には毀れものの

ようなたおやかさがあって、唐突な行動にであえば卒倒でもするのではないかというおそれが、その都度吉浦の心を鈍らせた。それも彼女はうすうす感じてはいたが、どうしようもないことだった。小さい時からそうなのだ。男の子が好意を持ってくれても彼女は当惑でしか答えられない。それは多くの人から好意を持たれる人間の持つ、一種の狡猾な知恵かも知れない。いつもだれかに見られていて親切にされ、何かやろうとするとすぐにだれかが来てやってくれてしまうので、自分では何ひとつ主体的には動けなくなってしまう、そうした人間が自己主張をせまられたときに出てくる防衛策なのだ。それが身についてしまっている以上、たとえば吉浦に何かの期待を持ったとしても、ただ待っているより他はない。向うが待つことにがまんがでなくてどこかに行ってしまうても、それもしかたがないのだ。

美沙子は左手でコートの襟を合わせながら、回りの人たちに足をそろえるようにして、出口のほうに歩いて行った。冷えきった外気の中で人々の足音は氷のかけらのような音を立てた。ホームの時計は十一時十分を示しており、まだ終電ではなかったが、いつもとはちがつて降りる客がかなりあった。どこかの柱でスイッチに手をかけながら助役か駅長の吹く笛の音が鋭く聞こえ、すぐに電車のドアが音を立てて閉まる、そのあと発車までの、ほんのわずかな、一秒か二秒の静寂が、美沙子の心をおだやかにみたした。街にあふれるクリスマスの狂騒からや々と脱けだして一日が無事に暮れたという安堵のようなものが、胸にひろがった。電車はホームの紙屑を巻き上げながら、風のように通り過ぎて行った。彼女は人ごみを少しはずれて、遠ざかる電車をふり返った。それはすぐスピードを増し、その日のできごとの一切を過去に送り込もうとするかのように、暗やみの中に消えて行った。

美沙子はホームを移動して行く人の列にもどって歩きだした。少し晚くなるとはいってきたが、十一時を過ぎて帰ることはめったになかったから、母が心配しているかも知れない。父もどこかよそに

まわっているとすれば、二人の妹は母の作るごちそうとクリスマスケーキに満足して、もう寝たところだ。彼女も高校を出るまではそうして家でイブを過ぎたものだ。時には父が家族をホテルのパーティに連れて行ってくれたこともあった。しかし大学に入ってからは何となく家を離れて仲間とつきあうことが多くなった。自分から進んでというわけではないが、さそわれて何となくというつきあいがふえてくる。吉浦も、さそわれて時どき顔を出すようになった劇団で知りあった仲だ。

階段を下りるとき彼女の前には屏風のように広い肩をした外人が小さな女の子の手を引いて歩いており、左側には彼女と同じ年頃の会社勤めらしい女の子が大きな紙袋をさげて、せかせかと歩いていった。小柄なので歩き方がせわしくなるのだろう。集札が近づくとその女の子のほうで美沙子より先になった。美沙子はその後に続きながら、右のポケットにあった切符を拳を握ったままつまみ出し、それを左手に持ちかえた。駅員は右側にいたので切符の出し方が不自然だったかも知れない。彼女は小さな背徳でも犯したようにくすりとした。その時だれかが右側から追いついて彼女と肩を並べた。彼女はあわてて笑みをおさめ、その男をちらと見た。髪がぼさぼさの、若い男だった。すぐに彼女は視線を戻して歩き続けようとした。ところが、おどろいたことに、その男が低い声で話しかけてきたのだ。

「国友さん、ちょっと、お話がしたいんです」

美沙子は息をのんで立ちどまった。顔に血がのぼった。しまった、この男は見ていたのだ。あんなことをしなければよかった。しかし、いったい何をしたというのだろう。

「吉浦君のことで……」

相手はまるで自分のほうが話しかけられてまごついてでもいるように口ごもった。美沙子は人ごみをさけて壁のほうに寄りながらその男の顔をまじまじと見つめた。太い毛糸で編んだ、濃いグレイの

セーターに首をうずめた子どもっぽい顔に、どこかで会ったような記憶がある。

「あなたは？ ……」

「ぼくは、小野っていうんです。医学部なんです、彼とは、つまり、吉浦とは、同年なんです」

どういうわけか男の口調には、息をはずませているようなところがある。逆に美沙子のほうはしだいに胸の動悸がおさまって落ちついてきた。

「お忘れかも知れませんが、あなたとは前に一度か二度、劇団の稽古場で、お会いしたことがあるんです」

「ああ……」と美沙子は思わず声に出した。

「あなたはいつか私の、髪のこと……」

「ええ、ええ、そうです。覚えていてくれましたか。あの時はほんとうに失礼しました。直接おねがいする勇気がなかったものですから。でも、助かりました。おかげで論文も何とか通って……そう、お礼もいわずにすぎちゃって」

相変らず息をはずませながら小野は、自分を信用してもらおうというつもりか、ひたむきにしゃべる。

「いいんですのよ、そんなこと。それで、吉浦さんのことって？」

美沙子はいぶかしげにたずねながら、果してこの人は集札口で、彼女が妙な手つきで切符をさしだしたのを見ていたのだろうかと思った。そう思ったときに再び、耳のあたりに血がのぼった。ポケットの中で握りしめている拳の内側に汗ばんでくるのが感じられる。

「ええ、最近彼と親しくしていらっしやるようですけど、ぼくもずっとつきあっていてわかっているし、そういうことをいってあげたほうがいいって仲間もいるものですから」

「どんなことですか」

彼女は少し不安になった。この人は何をいおうとしているのだろうか。自分は今、何かまちがった道に入りこみかけているのかも知れない。彼女はうす汚れた板壁に背中をつきかけて、横にからだをずらした。集札をめける人の影は、もうまばらになっている。

「でも、こんなところで立ち話はどうかと思うので」と、小野は手を動かしてあたりを見まわした。その手に誘われて美沙子はいまいにうなずき、彼といっしょに出口のほうへ歩き出した。

「どこかでお茶でも飲みながら、いいですか」

そういわれて時計を見ようとすると小野があわてて口早につけ加える。

「もちろん、そんなに時間はかかりませんよ」

しかし、あたりの店はほとんど閉まっている。この四、五年で急に大きくなったビルや商店街もそのあたりだけで、それを抜けるとすぐ神宮の森になるから、今時分コーヒーを飲むには六本木あたりまで行かなければならないだろう。

「どこで？」

美沙子は足をとめ、駅の正面にとりつけられた電灯の、上から降ってくる光の中で小野の顔を見上げた。寒い。冷気が、急に脚の下からはい上ってくる。

「実は、すぐそこに、車を待たせてあるんです」

小野はためらいがちにいった。

そのことばに美沙子是不審を持つべきだっただろう。この時になっても彼女はまだ、事の奇妙さに気づいていなかった。吉浦のことを持ち出されたのは彼女が吉浦と半日近くも行動をとみにしていた以上当然のような気がしていたが、そのこと自体実是不自然なのだ。それとこれとを結びつけるのな

ら、小野は二人をつけまわし、彼女が一人になるチャンスをつかがつていたことになる。そうしていつしよに集札を出てきたのなら、外に車を待たせてあるというのがおかしいではないか。同じ電車に乗っていたのではないとすれば、小野はこの駅のホームか出口で、いつ現われるあてもない美沙子を半日も待ち続けていたのだろうか。そうしたことに気づくには、事があまり唐突すぎた。

「じゃあ、うちにちょっと、電話をかけておいたほうがいいかしら」

駅の中にたしか赤電話があったはずだと、彼女は首をのびした。

「そうですね。でも、どこか店に入ってからでいいじゃないですか」

小野のいい方はていねいでいて、どこかあせているような強引さがある。

「行きましょう、寒いし。すぐですよ」

美沙子は背中あたりに軽くふれた彼の手にながされて歩きだした。

道路を照らしている電灯の光の輪を脱けだすあたりまでくると、前方から、ヘッドライトをきらめかせてゆつくりと近づいてくる一台の車があった。小野は美沙子の腕をとるようにして道路の端に立ちどまった。ほとんど同時に、滑るように寄ってきて静かに止まった車のドアが、内側から開いた。

「さあ、どうぞ……」

小野が後ろからいった。当然のことながら、中に車を運転しているもう一人の男がいることが彼女を急に不安にし、ためらわせた。しかし小野が、今度はほとんど押すようにして彼女をせかした。

「どこに行くんですか」

抗議のつもりでそういったが何の効果もなく、結局彼女は乗ってしまった。乗る時になぜか彼女は、消毒液のような薬品の匂いをかすかに嗅いだ。広い車の内部が、外国製のようだ。医者が往診などに使う車かも知れない。

ドアが重厚な音を立てて閉まると、車は二人の持ち込んだ冷えた空気をのせてすぐに走り出した。
「国友さん」

隣りに坐った小野があらたまつたように彼女を呼んだが、声がかすれている。二、三度せきばらいをして調子をととのえると、いっそうあらたまつた声色でいいなおした。

「国友美沙子さん、よく聞いてください」

しかし今度は、語尾がふるえた。

「何ですか」

何をもちたいぶっているのだろうと、美沙子は前方に揺れ動く街灯を見つめた。

「あなたは、いいですか。あなたは、われわれの持つ、ある目的のために、誘拐されました」

「なんですって？ 誘拐？」

そういつてから彼女は体を起こして、できるだけ相手との距離をおくために、反対側の窓のほうにじり寄った。

「そうです。誘拐です」

何のこと？ 誘拐？ 誘拐って、何？

「われわれは、〈被抑圧者の息子たちの組織——オスポ〉の一員です。あなたは、われわれの意図するある目的のために、誘拐されたのです」

小野は、今は完全に慄えのおさまつた明瞭な口調でくり返した。

「あなたの身柄はただいまからわれわれによって管理され、その指示に従わない時、あなたの生命は保証されません。われわれの目的が完全に果されなときも、同様に、不幸な結果となります」

時折すれちがう対向車のライトが、宿題を暗誦しているようなこどもっぽい小野の唇を照らしだし

たとき、美沙子は、これはちょっとした悪ふざけだなと思いなおし、同時に、いつもの困惑した感情がこの場をきりぬけるのに役立つかも知れないと思ったりした。

「どうということなんですか」

「わからなければ何度でもいつてあげるが、ぼくのことばの意味がわかったら、あとは何も聞かないようにしてください。聞くことは無意味だし、聞くこと自体が指示に違反します。いいですか、あなたは日本における有数な財閥の一つ、国友コンツェルンを代表する国友銀行の頭取の跡取り娘としてわれわれに誘拐されたのです。われわれはあなたに政治的取引の材料としての価値を認め、誘拐したのです。われわれはへ被抑圧者の息子たちの組織——オスボのメンバーで、この組織は国際的なものです」

「やめて。からかうのはやめてください」

美沙子は泣き声になった。

「うちに帰してください。ちょっと話をするだけだとおっしゃったじゃないですか」

彼女は運転席の背もたれを左手でつかんで哀願するようにいった。それは小野にだけではなく、無言のまま車を走らせ続けている運転席の男に対する訴えでもあったが、運転者はがっしりとした幅の広い背中をこちらに見せたまま、ふり返りもしなかった。

「ねえ、停めてくださいな。うちへ帰して。お願いですから……」

彼女はほとんど叫ぶようにいつて坐席を揺すりながら哀願し続けたが、二人の男はもう黙っているだけだった。彼女は絶望したように背をもたれ、左手をのぼして右のドアの把手をいじってみた。その時もまだ彼女の右手は、コートのポケットの中で固く握りしめられたままだったのだ。

「そのドアは開かないようになってる」

小野は冷たい声でいった。

「どうしようというんです。時間はかけないとおっしゃったじゃありませんか」

「事態を冷静にうけとめてほしいな。ぼくたちはふざけているわけじゃないんだ」

「吉浦さんの話だとおっしゃったじゃありませんか」

「あなたをだましたことは心苦しいが、吉浦はこの際ぼくたちに何の関係もないのです」

美沙子は全身から力が抜けて行くのを感じた。からだ小さく慄えはじめた。

「寒いですか」

小野は背もたれの上にあつた小さなアタッシェケースをとりあげながら、やさしく聞いた。美沙子は答えなかったが、齒がカチカチと小さな音を立てた。寒さではなく恐怖が彼女のからだをゆすつた。

中から何かをとりだすと小野はケースを元に戻して、暗い車内でしばらく美沙子のようすをうかがっていた。彼女は慄えながら泣いているように見えた。耳のあたりで乱れた髪が微かにそよぎ、時折大きな溜息をつくたびに、ゆたかに盛りあがった胸のふくらみが烈しくゆれた。

パチリと何かの蓋が開く音が、小野の手もとでした。次の瞬間、ふいに彼の手がのびて美沙子の肩をつかんだ。

「やめて」

その時美沙子はじめて、右手をポケットから出して抵抗した。それまでは、そうしていることが何かの救いにもなるように、しっかり握りしめたままポケットにかくしていたのだ。だとすれば、今や彼女は救われる望みを失ってしまったのにちがいない。

「しばらく眠っているんだね。そのほうが気分が落ちつくだろう」

彼女は何かを叫ぼうとしたが、その口は冷たいガーゼのようなものでふさがれた。しばらく彼女は息をとめて争ったが、苦しさに耐えかねて大きく息を吸いこんだとなん、強いクロロホルムの匂いが鼻孔から血液が逆流するような勢いで体内に流れこんだ。そのまま彼女の意識はうすれた。

小野はこんなにやくのように力を失った美沙子のからだを抱いたまま、なおしばらく薬品をしませたガーゼを口におしあてていたが、やがてそれを金属製のケースの中に戻すと、美沙子の姿勢を楽にしてやって、頭を自分の膝の上にのせた。

その時になってはじめて、車を運転していた男が口を開いた。

「うまく行ったか」

「はあ、うまくやったと思います」

「よく考えてみる。途中、だれか知った奴に会ったりしなかったか」

「会わなかったと思うなあ」

小野は終わったばかりのちよつとした格闘と、それに若い女性のからだを抱いているという興奮から、はずむ息をおさえるのに苦労していた。

「なるべく他人の顔を見ないようにしていましたから。いっしょにいた吉浦というのは多分僕の顔をおぼえていないんですよ。やつがあちこち店をかえてはこの人を連れまわすんで、それでこんなに遅くなっちゃったんです」

「いや、遅くなったのはかえって都合だったが、こんな夜更けによくついてきたな」

「吉浦のことで、何かスキャンダルでもあるようなことを仄めかしたんですよ。そしたら信用してくれましたね。しかし疲れたなあ。五時間から六時間ぐらい、見張ったりつけて歩いたりしてたんだからなあ」

「こっちだっていいかげん待ちくたびれたんだ。しかし、美人だな」

運転席の男は手をあげて車内灯をつけると、ハンドルをにぎったままふり返って美沙子の顔をのぞき込んだ。

「その仕事はこっちがやりたかった。お前、そんなかつこうで抱いてて、へんな気を起こすなよ」

男は顔を前方へ戻すと怒ったようにいった。

「先生、このひとは美人というだけでも取引の材料になるひとですね」

しかし、先生と呼ばれた運転席の男は何か不機嫌になりはじめているらしく、むっとだまっていた。

「でも、何人もの人間が生命や人生をかけるんだから、もっと美しくても美しすぎることはないし、もっと金があっても多すぎることはないんだ」

小野は車内からクロロホルムの匂いを逃がしてやるために窓を少し開けた。体温と呼吸で暖められた濁った空気が、冷えた外気と入れかわりはじめた。

「その女と話しているところを、人に見られなかったろうな。そのひとは美人だから、見たやつはもしかするとおぼえているかも知れない」

しばらくして運転席の男が、またいった。車はスピードをあげて、深夜の街並みを走り続けた。

2

その頃国友家では夫人の美子がいらしながら美沙子の帰りを待っていた。彼女の帰宅がこんなに遅れたことは今までにためしが無い。どうしたのだらう。十一時を過ぎて末娘の美加が眠いといった時に女中の清も下らせて、居間には次女の美紀と二人だけになった。夫の重機の帰らない日だっ

た。重機は、体は丈夫だが年のせいか酒のあとが保たなくなっている。それで酒の出る会議や商談などは割烹旅館でというのがいつかしきたりになり、行きつけの宿も二、三軒できた。きょうも関連企業の懇親会とかでそのうちのどこかに出かけている。そこには、あるいは女もいるのかも知れないが、美子はそういう詮索はしたことがない。

テレビの深夜劇場が古い西部劇を始めた時に、美子は、ともすれば画面に引きこまれがちな美紀をうながして美沙子の友だちを思い出させ、その電話番号を調べては何軒か連絡をとってみた。その中にやっと、佐藤君子という、その夜劇団のパーティでいっしょだった同級生が見つかったのだが、その君子の応答は何となく歯切れが悪く、九時すぎに新宿で別れたが、たしかそれから電車で帰ったはずだという。

「九時にですって？」

美子はせきこんだ。

「ひとりでございましたか、その時、どなたか連れの方はいらっしゃらなかったのですか？」

「さあ、パーティが終ったのが八時半ごろで、それから五、六人で新宿でお茶を飲んだりして、九時半ごろになっていたかなあ、駅の前で、さよならって、たしか美沙子さん、駅の中に入って行ったんですよ。なんだかその時、ひとりじゃなかったような気がするんですけど……」

「どなたと？ どなたとごいっしょでしたのですか」

「さあ、それが、誰だったかなあ……」

「お願い。それを思い出していただけませんでしようかしら」

ほとんどずがるような思いでたずねても、君子の話は肝心のところであいまいになる。

「どなたかいらしたことは確かなんですね？」